

研究代表者 所属・職：看護学部・准教授

氏 名：新美 綾子

研究課題名：知多市・東海市における地域在住災害支援ナースの養成・強化とナース間のネットワーク

研究の目的

東海市と知多市は、いずれも知多半島西海岸にあり、南海トラフ地震等の巨大地震が発生した場合には、大津波の危険にさらされている。広域災害時には、一時的に行政機能が低下するのは必至であり、災害マニュアル等で規定されている公助が機能するまでの間、被災者同士が助け合って命をつながなければならない。この被災者同士の共助において、人々の健康を守るために大きな力となるのは、医療・看護の専門的知識を有している看護職である。看護職の中でも、病院等で勤務している人は、参集行動を優先する。しかし、潜在看護職（看護職の免許は保有しているが、病院等で正規職員として働いていない人）は、被災住民とともにいる。研究者らは、2016 年度に東海市在住の潜在看護職を対象に、災害医療看護研修会を複数回実施し、潜在看護職同士のネットワークを構築し、一定の成果を得た。我々は、この研修会を受講した潜在看護職を地域在住災害支援ナース DiRAN(Disaster Relief Assistance Nurse)と命名し、「被災住民の中において、災害時の衛生的環境の保持、被災者の健康保持、負傷者の応急救護などに必要な専門的知識をもっている看護職である。自分と自分の家族の安全を前提に、発災直後から約 72 時間の災害急性期において、自らの判断で行動し、複数の DiRAN が同じ場所に居合わせた場合は、相談、協力し合って、救助者が来る時まで、避難者を健康の側面で支える」と定義した。

今回は、隣接している知多市の潜在看護職への働きかけを行い、東海市と知多市がともに災害に強い街であるために、知多市と東海市における DiRAN の養成と強化、DiRAN 間のネットワークの構築を目指した。具体的な内容としては、2016 年度の実施を踏まえ、東海市と知多市における潜

在看護職の募集と研修会の企画・運営である。

プロジェクト目標の達成状況・成果内容

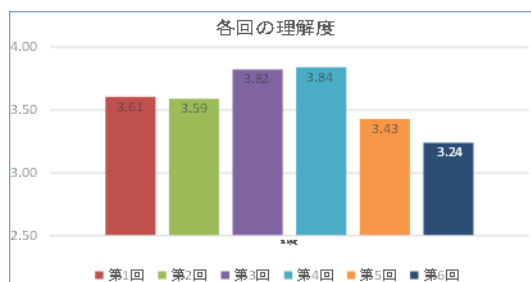
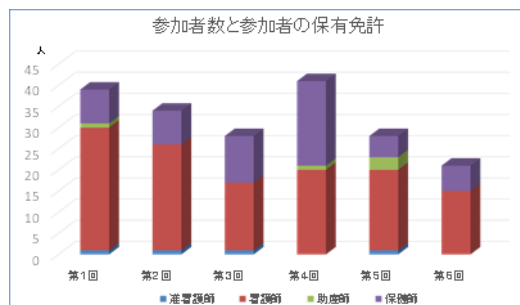
2016 年度プログラムは全 6 回で構成したが、今回は、災害時のトイレの取り扱いに関する研修会を追加し、全 7 回とした。また、東海市の DiRAN は 2 回目の受講となるため、防災キャンプと東海市防災訓練への参加を追加した。開催した研修会は次の通りである。

回	開催日・テーマ	研修内容
1	2017年10月1日(日) 「災害現場での実体験を聴こう！」	中学校教諭として勤務中に東日本大震災が発生し、外部からの救助者が到着するまでの間の壮絶な体験を聴き、日ごろ何を準備し、どのような心構えでいるべきかを学ぶ。
東海市のみ	2017年10月14日(土) 「防災キャンプを体験しよう！」	災害時、ライフラインが止まったことを想定して、防災キャンプを体験する。災害時に便利なキャンプ用品の紹介、ポリ袋を使用した調理方法、災害時の口腔ケア方法を体験し学ぶ。
2	2017年10月21日(土) 「災害が起きたら、どうする？」	災害ソーシャルワーカーとして災害現場で活動している講師による災害現場と支援に関する専門的な解説を聴き、避難所・福祉避難所に避難している複数の事例に対する支援方法をグループディスカッションを通して考える。
3	2017年11月11日(日) 「災害時のトイレの扱いについて学ぼう！」	災害時のトイレを清潔に保つために何をすればいいのか学び、段ボールトイレ、新聞紙トイレの作成を体験する。
東海市のみ	2017年11月19日(日) 「防災訓練に参加しよう！」	東海市総合防災訓練に参加し、潜在看護職として、地域で何ができるか検証する。

4	2017年12月2日(土) 「災害の応急対応を知ろう！」	災害時のトリアージと応急処置について学ぶ。 骨折、フレイルチェスト、穿通性異物、開放性気胸、脊髄損傷疑いなど
5	2017年12月16日(土) 「災害時にお産が始まったら！」	「避難所でお産が始まったらどうするか」など、妊産婦さんへの対応および応急処置について学ぶ。
6	2018年1月20日(土) 「シミュレーションゲームで災害に対応しよう！」	開発中のシミュレーションゲーム B72 (防災 72 時間) を試用し、避難所での 72 時間で起きる様々な出来事を体験し、グループディスカッションを通して対応を考える。
7	2018年2月17日(土) 「災害時に何が出来るか考えよう！」	今まで学んだことを踏まえて、各市・地区のハザードマップを確認しながら看護職として何が出来るかを考えるとともに、受講者同士の親睦を図る。

優れた成果があがった点

1. 第1回～6回までの参加者数は、最低でも20人を確保できた。
2. 40人とばらつきはあったが、6回までの各回のプログラム理解度は4点満点中最も低くても3.24点であり、このプログラムの妥当性について一定の評価はできる。
3. 参加者は、災害時の DiRAN としての行動を前向きにとらえており、地域の防災訓練などにも積極的に参加する意思を持っている。
4. 参加者は、今後の DiRAN 研修会において学習したい内容を具体的に表明され、高い学習意欲が感じられた。



研究期間終了後の今後の展望

多くの潜在看護職が DiRAN 養成研修会を受講して下さるような働きかけを継続していくとともに、他の医療職の免許保有者、災害時に力になる他職の有資格者、技能保有者などにも働きかけ、災害時の共助システムが構築できることを目指す。さらに、この共助システムが地域包括ケアシステムの一部として機能することを最終的な目標とする。